三沢宮ノ前遺跡３

－福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第２７１集

２０１３

小郡市教育委員会

三沢宮ノ前遺跡３

－福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第２７１集

２０１３

小郡市教育委員会

序　文

本書は、県道本郷基山線新設工事に先立って、小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

本遺跡が所在する小郡市北西部の通称三国丘陵には、弥生時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く存在しています。今回の調査区は、丘陵からやや南に下った段丘上に位置しますが、ここでもやはり弥生時代と中世の遺構が確認されました。

今回の調査の中心となるのは中世の集落です。6 棟の掘立柱建物群が規則正しく配置され、その周囲では井戸などが検出されるとともに、大型の溝によって土地が区画されていました。遺構の時期は 13 世紀頃で、新しい地域の歴史が発見されたと言えます。今回得られた成果が今後永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いです。

最後に、事業主体である福岡県久留米県土整備事務所、現地発掘調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 25 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会

教育長　清 武　輝

例　言

1．本書は、小郡市三沢地内における県道本郷基山線新設工事に伴って、小郡市教育委員会が平成23年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．発掘調査は、福岡県久留米県土整備事務所から委託を受け、小郡市教育委員会が行った。

3．遺構の写真撮影は杉本岳史が行い、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。

4．遺構実測、遺物の復元・実測・製図には、担当者の他に白木千里、久住愛子、衛藤知嘉子、佐々木智子、井上千代美、永倉さゆみ、宮崎美穂子、今村杏奈ら諸氏に多大なる協力を得た。

5．遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房に委託した。

6．遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土調査法第Ⅱ座標系に則っている。

7．遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。

8．本書の執筆及び編集は杉本が担当した。

本 文 目 次

第１章　調査の経過と組織…… 1
　１．調査に至る経緯…… 1
　２．調査の経過…… 1
　３．調査組織…… 1
第２章　位置と環境…… 2
第３章　遺構と遺物…… 5
　１．弥生時代の遺構と遺物…… 5
　（１）土坑 …… 5
　２．中世の遺構と遺物…… 7
　（１）掘立柱建物 …… 7
　（２）土坑 …… 10
　（３）溝状遺構 …… 16
　（４）ピット …… 16
　３．時期不明の遺構と遺物…… 17
　（１）溝状遺構 …… 17
第４章　まとめ…… 18
出土遺物観察表…… 19
写真図版

挿 図 目 次

第１図　三沢宮ノ前遺跡　過去の調査地点位置図 (S=1/2,500) …… 2
第２図　三沢宮ノ前遺跡周辺の中世の主要遺跡分布図 (S=1/50,000) …… 3
第３図　三沢宮ノ前遺跡３　A・B 区全体図 (S=1/200) …… 4
第４図　三沢宮ノ前遺跡３　C 区全体図 (S=1/200) …… 5
第５図　５号土坑実測図 (S=1/60) …… 6
第６図　５号土坑出土土器実測図 (S=1/4) …… 6
第７図　５号土坑出土石製品実測図 (1 は S=1/3、2・3 は S=1/2) …… 7
第８図　1・3 号掘立柱建物実測図 (S=1/60) …… 8
第９図　２号掘立柱建物実測図 (S=1/60) …… 9
第 10 図　４号掘立柱建物実測図 (S=1/60) …… 11
第 11 図　5・6 号掘立柱建物実測図 (S=1/60) …… 12
第 12 図　1・2 号土坑実測図 (S=1/40) …… 13
第 13 図　3・4 号土坑実測図 (S=1/40) …… 14
第 14 図　土坑・掘立柱建物出土遺物実測図 (S=1/4) …… 15
第 15 図　中世遺構出土石製品及び土製品実測図 (1 ～ 3 は S=1/4、4 は S=1/2) …… 16
第 16 図　1 号溝状遺構土層断面実測図 (S=1/60) …… 17
第 17 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 (S=1/4) …… 18

表 目 次

表１　掘立柱建物計測表 …… 18
表２　出土遺物観察表（土器・青磁など） …… 19
表３　出土遺物観察表（石製品・土製品） …… 20

図版目次

図版１①Ａ・Ｂ区全景 (南西から)
図版２①１号掘立柱建物検出状況 (西から)
②１号掘立柱建物完掘状況 (西から)
③１号掘立柱建物 P1 土層断面 (北から)
④１号掘立柱建物 P3 土層断面 (北から)
図版３①３号掘立柱建物完掘状況 (南から)
②４号掘立柱建物完掘状況 (西から)
③４号掘立柱建物 P3 土層断面 (北から)
④４号掘立柱建物 P4 土層断面 (南から)
図版４①６号掘立柱建物検出状況 (西から)
②６号掘立柱建物完掘状況 (西から)
③１号土坑土層断面 (西から)
④１号土坑完掘状況 (西から)
図版５①３号土坑完掘状況 (北から)
②４号土坑土層断面 (北から)
③４号土坑土層断面 (西から)
④４号土坑完掘状況 (北から)
図版６①１号溝状遺構土層断面 1(南から)
②１号溝状遺構土層断面 2(南から)
③２号溝状遺構完掘状況 (南から)
④３号溝状遺構完掘状況 (北西から)
図版７　出土遺物
②Ａ・Ｂ区全景 (上空から)
⑤２号掘立柱建物検出状況 (西から)
⑥２号掘立柱建物完掘状況 (西から)
⑦２号掘立柱建物 P1 土層断面 (北から)
⑧２号掘立柱建物 P5 土層断面 (東から)
⑤４号掘立柱建物 P5 土層断面 (南から)
⑥５号掘立柱建物検出状況 (西から)
⑦５号掘立柱建物完掘状況 (西から)
⑧５号掘立柱建物 P5 土層断面 (南から)
⑤２号土坑土層断面 (北から)
⑥２号土坑完掘状況 (北から)
⑦３号土坑土層断面 (北から)
⑧３号土坑土層断面 (西から)
⑤５号土坑土層断面 (北から)
⑥５号土坑完掘状況 (北から)
⑦５号土坑土器出土状況 (南東から)
⑧１号溝状遺構完掘状況 (南から)
⑤４号溝状遺構検出状況 (西から)
⑥５号溝状遺構完掘状況 (南西から)
⑦調査風景

第1章　調査の経過と組織

1．調査に至る経緯

今回の開発事業に関する当該地の事前審査協議は、平成23年10月3日付で「埋蔵文化財の有無について（照会）」（事前審査番号11085）の申請が、福岡県久留米県土整備事務所長名で提出されたことに始まる。これを受けて小郡市教育委員会は平成23年11月7・8日に試掘調査を実施し、工事予定範囲のうち1,064㎡に遺跡が存在することを確認した。その後、本調査に向けての様々な協議を経て、平成23年12月2日付で平成23～24年度の2ヵ年にわたる「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、同じく12月28日付で平成23年度の埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。なお、平成24年度は6月4日付で委託契約を締結して整理作業を進め、平成25年3月31日で事業が完了した。

2．調査の経過

調査の対象としたのは、試掘調査によって遺跡が確認された1,064㎡である。これらは道路によって大きく3分割され、便宜上西からそれぞれA・B・C区とした。現地調査は平成24年1月11日に着手し、平成24年3月16日に終了した。主な経過は以下の通りである。

平成24年1月11日：西端のA区から表土剥ぎ開始。幅2.5ｍの大溝（1号溝状遺構）を検出。
1月17日：発掘作業員を導入して、遺構の検出・掘削を開始する。全ての表土剥ぎ終了。
1月20日：1号溝状遺構の最下層から滑石製石鍋片が出土。
1月23日：掘立柱建物群の検出及び掘削開始。
1月30日：遺構実測を本格的に始める。
2月10日：B区ほぼ完掘、C区の調査に着手。5号土坑から多くの弥生土器が出土。
2月16・17日：雪の中、全体遺構図の実測を行う。
2月20日：空中写真撮影。
3月16日：埋め戻し終了。

3．調査の組織

三沢宮ノ前遺跡3における発掘調査に関係する組織は以下のとおりである（平成23・24年度）。

【福岡県久留米県土整備事務所】
所　　長　横枕 篤（平成23年度）、後藤 俊一（平成24年度）
＜都市施設整備課＞
課　　長　吉田 達矢
副　　長　辻　吾一
松尾 真司（平成23年度担当）、長野 裕信（平成24年度担当）

【小郡市教育委員会文化財課】
教 育 長　清武 輝
教育部長　吉浦 大志博
＜文化財課＞
課　　長　片岡 宏二
係　　長　柏原 孝俊
技　　師　杉本 岳史（調査担当）

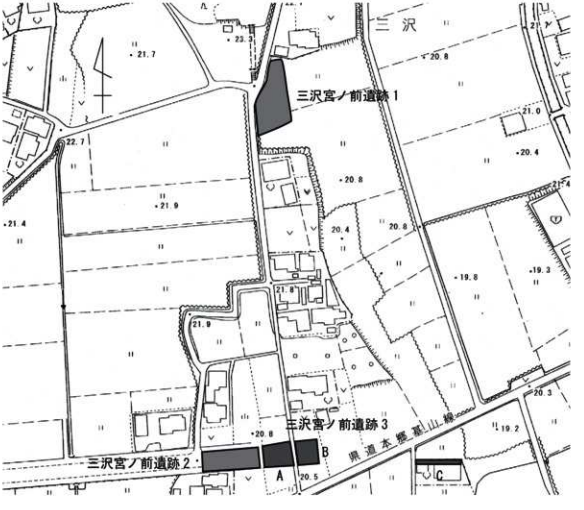
第２章　位置と環境

三沢宮ノ前遺跡３は、宝満川右岸の標高約 22 m を測る中位段丘上に位置する。この段丘は、北側に広がる丘陵の一支脈が南へ次第に高度を下げ、その末端付近でより低位の段丘へと連続する。東西両側は谷によって開析され、幅約 200 m、長さ約 1km程の細長い段丘を形成している。谷部との比高差は１m程度である。

遺跡は、平成５年度（1993）に実施された三国地区圃場整備事業によって初めて調査された。場所は、今回の調査区から北側約 250 m に位置する日吉神社のすぐ南東側である。遺跡の中心は弥生時代の集落であったが、その際に中世の溝状遺構も確認されている。平成 14 年度（2002）には２次調査が実施された。調査原因は、今回と同じ県道本郷基山線の道路改良工事である。この時の調査の中心は古墳時代後期の集落で、他には同じく中世の溝状遺構を検出している。

弥生時代から古代を中心に数々の遺跡が存在する小郡市だが、中世の遺跡も多く確認されている。これらは市内でも宝満川及び秋光川流域に延びる中位・低位段丘上に密集する傾向が顕著で、中世の流通と生活のあり方を想像させる。小郡市内中部では、宝満川沿いの川港で中国産陶磁器が大量に出土する稲吉元矢次遺跡が注目される。この遺跡は 12 世紀前半から 14 世紀にかけて営まれた集落で、大量の遺物の中には鉄生産を想起させる鉄製取瓶及び多量の鉄滓や碁石といった娯楽品なども含まれる。周辺では宝満川右岸の大板井遺跡や小板井屋敷遺跡、左岸の上岩田遺跡、井上薬師堂遺跡、薬師堂東遺跡などでも中世の遺構が見られる。一方、市内西端部付近の秋光川左岸には小郡正尻遺跡、小郡野口遺跡、福童山の上遺跡などで高密度に中世の遺構が展開している。

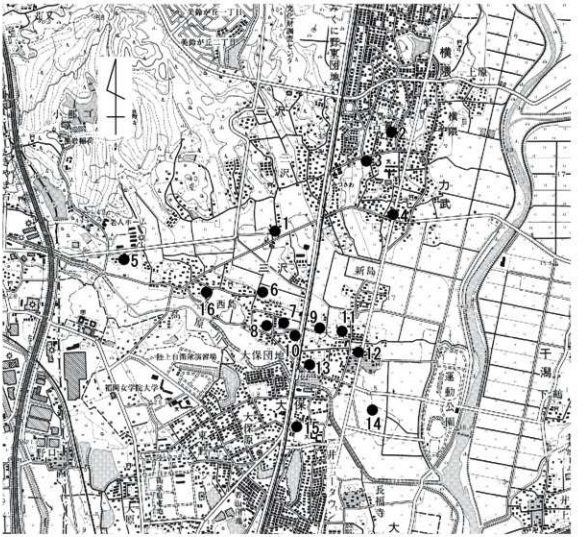
三沢宮ノ前遺跡の周辺では、先述のように北部の丘陵地から谷に開析された中位段丘が何本も舌状台地として南東方向に延びている。当遺跡の北東側の段丘上には三沢古賀遺跡（2・3）、力武内畑遺跡（4）が存在するが、



第１図　三沢宮ノ前遺跡　過去の調査地点位置図 (S=1/2,500)

最も遺跡密度が高いのは、当遺跡から１本谷を挟んだ西側に位置する段丘上である。西部には輸入陶磁器が多く出土した西島遺跡３（5）が存在し、現在の西鉄沿線には 1359 年の大保原合戦に関連する遺跡として近年特に注目を浴びる三沢寺小路遺跡（7・8）、三沢権道遺跡（9・10）などがある。これらの遺跡群からやや南東に進んだ大保地区では、平成 20 年（2008）から翌年にかけて調査された大保横枕遺跡２（14）で、12 世紀から 13 世紀の大型の区画を持つ集落が確認された。この遺跡のすぐ北側には式内社御勢大霊石神社が存在し、その周辺では大保龍頭遺跡（12）で数多くの中世の遺構が見つかっている。なお、大保西小路遺跡（13）では青銅製の懸仏が出土した。

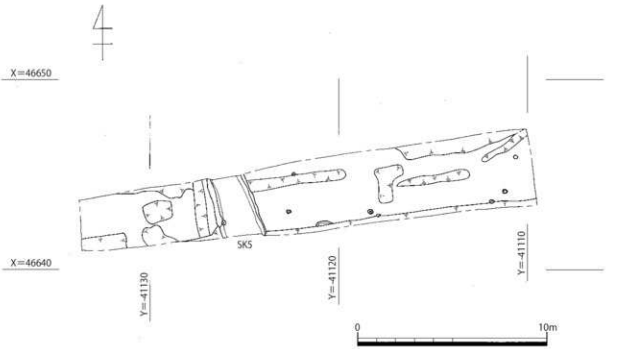
以上のように、周辺地域では数多くの中世遺跡が確認されているが、三沢宮ノ前遺跡が立地する台地上の様相はこれまで明らかにされてこなかった。今回の調査成果は、今後の地域像の復元に向けて非常に大きな意味を持つと言える。



第２図　三沢宮ノ前遺跡周辺の中世の主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

1. 三沢宮ノ前遺跡３　2. 三沢古賀遺跡１　3. 三沢古賀遺跡３　4. 力武内畑遺跡３
5. 西島遺跡３　6. 三沢畝道町遺跡　7. 三沢寺小路遺跡２・４　8. 三沢寺小路遺跡３・５
9. 三沢権道遺跡１　10. 三沢権道遺跡２　11. 大保毎々遺跡　12. 大保龍頭遺跡１～６
13. 大保西小路遺跡　14. 大保横枕遺跡２　15. 善風塚跡　16. 西島如来石像

第 3 図　三沢宮／前遺跡 3　A・B 区全体図 (S=1/200)



第４図　三沢宮ノ前遺跡３　Ｃ区全体図 (S=1/200)

第３章　遺構と遺物

三沢宮ノ前遺跡３で検出した主な遺構は下記の通りである。時期は、弥生時代の５号土坑以外はいずれも中世と考えられる。ただし、大型の１号溝状遺構は出土遺物が極少量で時期判断が難しい。第 17 図に表したのは古墳時代後期の須恵器だが、これらは西側に広がる同時期の集落からの流れ込みと考え、最下層から出土した滑石製石鍋片の存在及び遺構の主軸の方位を重視して中世の遺構と判断した。２号土坑は井戸状遺構で、４号土坑は土壙墓の可能性も考えられる。当遺跡で注目されるのは、６棟の掘立柱建物群である。長軸方位に２種類あることや建て替えが見られる３号建物の存在から少なくとも２時期存在すると考えられるが、いずれも規則正しく配置されている。なお、２号土坑からは 13 世紀前半の遺物がまとまって出土した。

●弥生時代　‥　土坑１基

●中世　　‥　掘立柱建物６棟、土坑４基、溝状遺構３条、その他ピット群

１．弥生時代の遺構と遺物

（１）土坑

５号土坑（第５図、図版５）

調査区最東端のＣ区に位置し、標高 19.7 ｍを測る。南北に長い長方形状の土坑と考えられるが、北端・南端とも検出できず、大きさは現状で長さが 3.50 ｍ以上、幅が最大 2.25 ｍである。壁面の残存状況は比較的良好で、壁高は最大 0.91 ｍを測る。埋土の上層はシルト質を基本とし、下層はより粘性が高い。埋土中上層及び床面直上で多くの弥生土器を検出した。

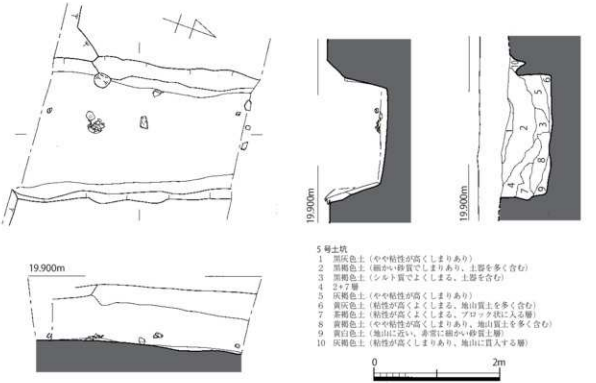
出土遺物

土器（第６図、図版７）

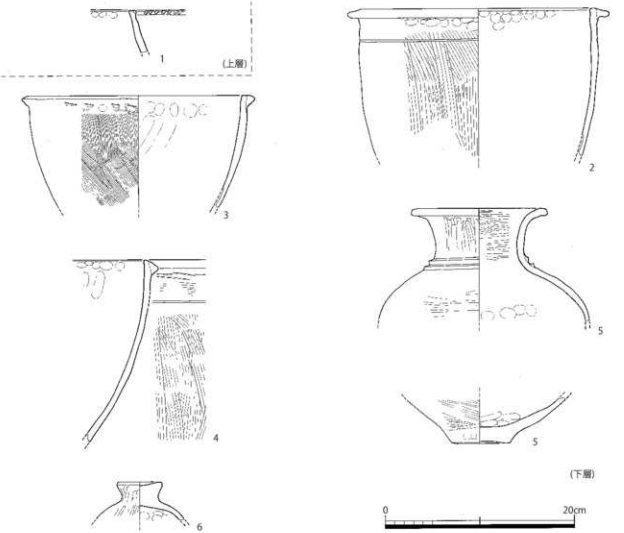
第６図２から６は床面直上から出土した。２から４は甕で、口縁部の断面はいずれも三角形に近い。５は壺で、胴部と頸部の境目に断面三角形の突帯を２条有する。外面には丹塗りの後に黒塗りを施す。

石器（第７図）

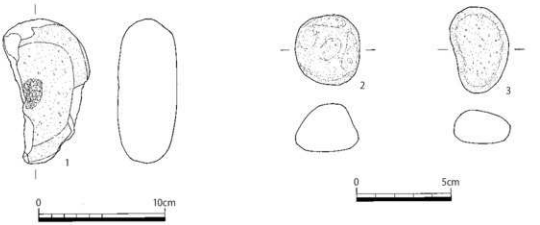
第７図１は小型の台石で、長さ 11.4㎝を測る。上面に敲打面が見られる。



第５図　５号土坑実測図 (S=1/60)



第６図　５号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



第７図　５号土坑出土石製品実測図（1 は S=1/3、2・3 は S=1/2）

２．中世の遺構と遺物

（１）掘立柱建物

1 号掘立柱建物（第８図、図版２）

Ａ区の北東端部付近に位置し、標高は 20.8 m を測る。長軸をＮ -84°- Ｅにとる。２×１間の側柱建物で、規模は桁行 4.01 ～ 4.02 m、梁行 2.98 ～ 3.06 m、桁間 1.86 ～ 2.14 m を測る。柱掘り方は円形を基調とし、径は 26 ～ 33㎝、深さは 25 ～ 44㎝を測る。6 基のピットのうち 4 基で柱痕を確認した。柱の直径は 10 ～ 20㎝を測る。なお、当初は隣接する３号建物を庇部分と捉え、４号建物と同様の構造を呈するものと考えていたが、４号建物の庇部分と比較してピットの規模が大きいこと、３号建物部分のみに建て替えが見られることから、ここでは別遺構として報告する。

出土遺物

土器

Ｐ２・Ｐ３から土師器の小片が出土したが、詳細は不明である。

2 号掘立柱建物（第９図、図版２）

Ａ区の南東端部付近に位置し、標高は 20.8 m を測る。長軸をＮ -84°- Ｅにとる。３×２間の側柱建物で、規模は桁行 5.41 ～ 5.54 m、梁行 3.79 ～ 3.80 m、桁間 1.74 ～ 1.92 m、梁間 1.85 ～ 1.94 m を測る。柱掘り方は楕円形を基調とし、径は 30 ～ 40㎝、深さは 23 ～ 42㎝を測る。10 基のピットのうち 7 基で柱痕を確認した。柱の直径は 10 ～ 20㎝を測る。

出土遺物

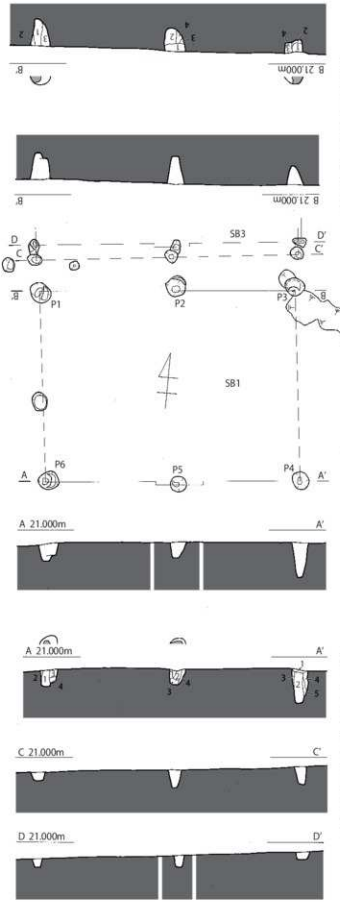
なし

3 号掘立柱建物（第８図、図版３）

Ａ区の北東端部に位置し、標高は 20.8 m を測る。1 号建物に隣接する。遺構の大部分は調査区外に存在するため詳細は不明であるが、1 号建物と同様の２×１間の側柱建物と推測される。規模が分かるのは桁部分のみで、桁行 4.16 m、桁間 2.02 ～ 2.14 m を測る。柱掘り方は楕円形を基調とし、径は 20 ～ 22㎝、深さは 12 ～ 28㎝を測る。

出土遺物

なし



1号掘立柱建物

P1
1 黒褐色土（粘性が高いがしまらない、柱痕）
2 黒灰色土（シルト質でしまりあり）
3 黒灰色土＋明黄褐色土（明黄褐色土ブロックを多く含む、裏込土）

P2
1 灰褐色土（シルト質でしまりあり、地山質土粒を多く含む）
2 黒褐色土（粘性が高いがしまらない、柱痕）
3 明黄褐色土（地山と同質、しまりあり、裏込土）
4 暗黄褐色土（砂質でしまりあり、裏込土）

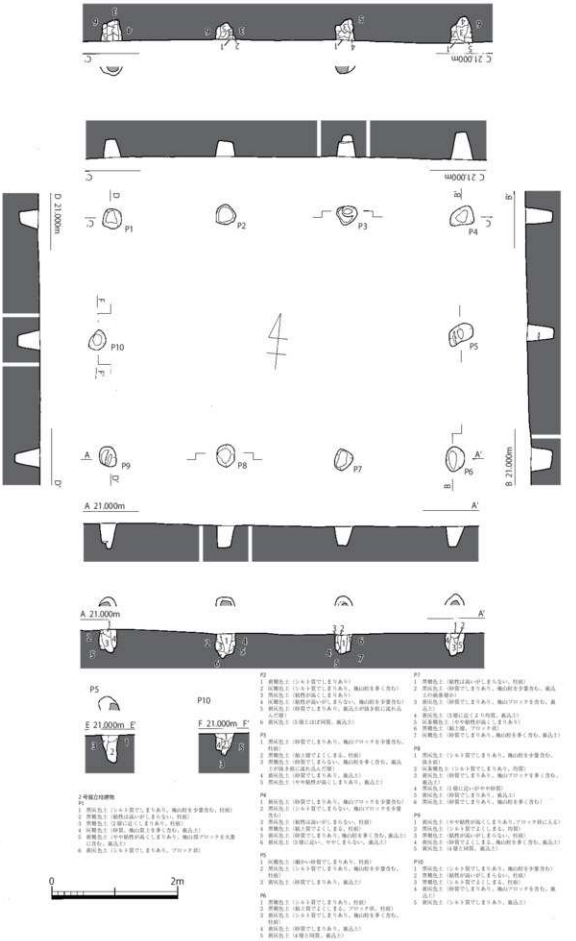
P3
1 黒灰色土（シルト質でよくしまる、柱痕）
2 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込土の流れ込み）
3 灰褐色土（シルト質でしまりあり、均質、裏込土か）
4 灰褐色土＋黄褐色地山質土

P4
1 灰褐色土（シルト質でしまりあり）
2 黒灰色土（粘性が高いがしまらない、地山ブロックを少量含む、柱痕）
3 灰褐色土（地山質の明黄褐色砂質土を多く含む、しまりあり、裏込土）
4 灰褐色土（3と同質）
5 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込土）

P5
1 灰褐色土（粘性が高いがしまらない、ブロック状、柱痕）
2 黒灰色土（粘性が高くしまりあり、柱痕）
3 黄灰色土（粘性が高くしまりあり、地山質を少量含む）
4 黄褐色土（砂質しまりあり、裏込土）

P6
1 黒灰色土（粘性が高いがしまらない、柱痕）
2 黒褐色土（砂質でしまりあり、裏込土）
3 黒灰色土（シルト質でしまりあり、地山粒を多く含む、裏込土）
4 茶褐褐色土（シルト質でしまりあり、均質）

第８図　１・３号掘立柱建物実測図 (S=1/60)



第 9 図　2 号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

4 号掘立柱建物（第 10 図、図版 3）

B 区東端部に位置し、標高は 21.3 m を測る。長軸を N -81° - E にとる。2 × 2 間の総柱建物で、北側に庇を持つ。規模は桁行 4.46 ～ 4.59 m、梁行 3.25 ～ 3.28 m、桁間 2.19 ～ 2.30 m、梁間 1.51 ～ 1.77 m を測る。柱掘り方は円形から楕円形を基調とし、径は 15 ～ 45㎝、深さは 12 ～ 42㎝を測る。庇部のピットのうちＰ 8・9 は非常に小型で、径 20㎝程度である。12 基のピットのうち 7 基で柱痕を確認した。柱の直径は 10 ～ 17㎝を測る。

出土遺物

なし

5 号掘立柱建物（第 11 図、図版 3）

B 区南西部に位置し、標高は 21.2 m を測る。長軸を N -84° - E にとる。3 × 1 間の建物で、規模は桁行 4.50 ～ 4.61 m、梁行 2.57 ～ 2.80 m、桁間 1.42 ～ 1.61 m を測る。柱掘り方は楕円形を基調とし、径は 24 ～ 42㎝、深さは 12 ～ 33㎝を測る。8 基のピットのうち 6 基で柱痕を確認した。柱の直径は 13 ～ 28㎝を測る。

出土遺物

土器（第 14 図）

第 14 図 15 はＰ 7 から出土した土師器皿である。その他、Ｐ 3・6・8 からも土師器の小片が出土したが、詳細は不明である。

6 号掘立柱建物（第 11 図、図版 4）

B 区北西部に位置し、標高は 21.2 m を測る。長軸を N -9° - W にとる。各ピットの規模が非常に小さい掘立柱建物である。2 × 2 間の側柱建物で、規模は桁行 3.10 ～ 3.12 m、梁行 2.64 ～ 2.68 m、桁間 1.50 ～ 1.60 m、梁間 1.31 ～ 1.33 m を測る。柱掘り方の径は 10 ～ 18㎝、深さは 8 ～ 35㎝を測る。柱痕は確認できなかった。

出土遺物

なし

（2）土坑

1 号土坑（第 12 図、図版 4）

A 区北東端部に位置し、標高は 20.8 m を測る。遺構は整った隅丸長方形状を呈し、検出面の長さ 91㎝、幅 72㎝、床面の長さ 76㎝、幅 50㎝、深さ 30㎝を測る。埋土の質が 1・2 号掘立柱建物のピット埋土と近く、同時期の遺構と考えられる。

出土遺物

土器

土師器の小片が出土したが、詳細は不明である。

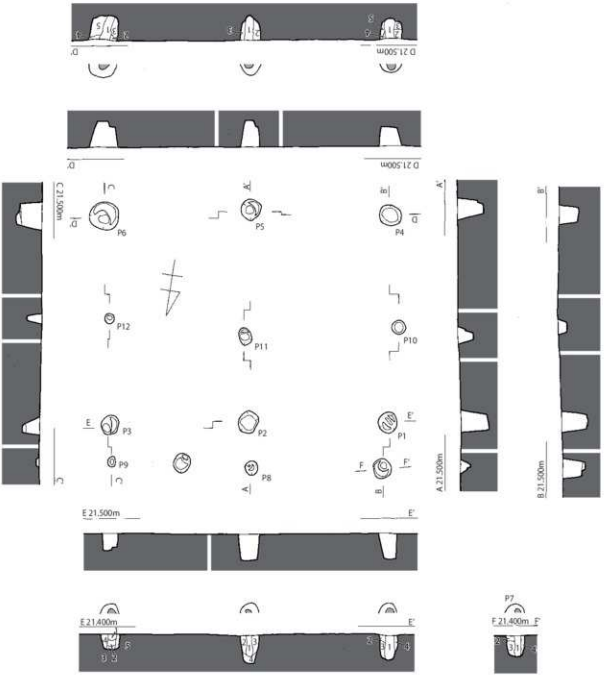
2 号土坑（第 12 図、図版 4）

B 区北端部付近に位置する井戸状遺構である。標高は 21.1 m を測る。遺構は検出面・床面ともに楕円形状を呈し、上端で長さ 1.84 m、幅 1.79 m、床面で長さ 0.84 m、幅 0.70 m、深さ 1.73 ＋ α m を測る。埋土は砂質土と粘質土が互層状に重なり、典型的な井戸の埋土と言える。遺物は下層を中心に多く出土したが、壁面の崩落が著しく、一部床面の完掘ができていない。

出土遺物

土器・磁器（第 14 図、図版 7）

第 14 図 1・2 は上層出土遺物である。1 は青磁碗で、2 は土師器皿である。3 から 10 は下層出土遺物である。3 から 5 は青磁碗で、4 は高台部径 6.4㎝、5 は同 4.4㎝を測る。7・8 は完形の土師器皿である。7 は口径 8.9㎝、器高 1.2㎝、8 は口径 9.4㎝、器高 1.2㎝を測る。いずれも底部は糸切りである。11・12 は最下層出土遺物で、11 は須恵質の鉢の口縁部小片である。12 は瓦質土器の椀の口縁部小片である。



4号掘立柱建物

P1
1 黒灰色土（粘性は高いがしまりない。地山粒を多く含む。柱痕）
2 黒灰色土（砂質でしまりあり。礫込上）
3 黄褐色土（やや粘性が高くしまりあり。2層より均質。礫込上）
4 黒灰色土（2層と同質。礫込上）

P2
1 黒灰色土（粘性は高いがしまりない。柱痕）
2 黄褐色土（砂質でしまりあり。礫込上）
3 黄褐色土（2層と同質。礫込上）
4 黄褐色土（シルト質でしまりあり。地山質土を層状に含む）

P3
1 黒灰色土（粘性は高いがしまりない。柱痕）
2 灰黒褐色土（粘性が高くしまりあり。地山粒を多く含む。柱痕）
3 灰褐色土（粘性が高くしまりあり。柱痕）
4 黒灰色土（やや粘性が高くしまりあり。礫込上）
5 黒灰色土（4層と同質。礫込上）

P4
1 黒灰色土（シルト質でしまりあり。均質。柱痕）
2 黄褐色土（砂層でしまりあり。礫込上）
3 黄灰色土（2層とほぼ同質。礫込上）
4 黒灰色土（砂層でしまりあり。礫込上）
5 灰褐色土（やや粘性が高くしまりあり。礫込上）

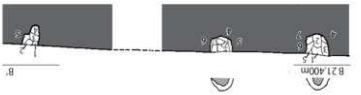
P5
1 黒灰色土（シルト質でしまりあり。径3cm大の地山ブロックを多く含む。柱痕）
2 茶褐色土（粘性が高くよくしまる。地山ブロックを少量含む。礫込上）
3 茶褐色土（2層と同質。礫込上）

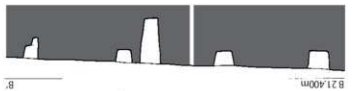
P6
1 灰褐色土（シルト質でしまりあり。地山ブロックを少量含む。柱痕）
2 黄灰色土（シルト質でしまりあり。礫込上）
3 黄褐色土（粘性が高くしまりあり。地山ブロックを多く含む。礫込上）
4 黄灰色土（2層と同質。礫込上）
5 黄褐色土（2層と同質。礫込上）

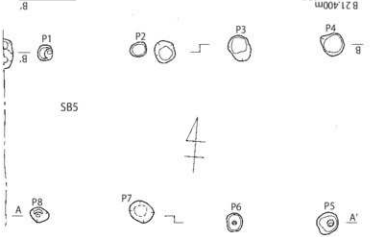
P7
1 黒灰色土（粘性が高くしまりあり。地山粒を多く含む。柱痕）
2 黄灰色土（シルト質でしまりあり。ブロック状に入る。礫込上）
3 黄褐色土（砂質でしまりあり。礫込上）
4 黄灰色土（2層と同質。礫込上）

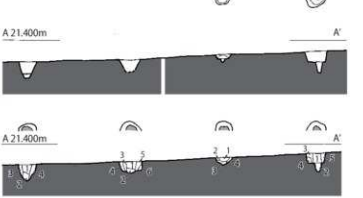
0 2m

第 10 図　4 号掘立柱建物実測図 (S=1/60)









5号掘立柱建物

P1
1 黒灰色土（粘性が高くしまりあり、ブロック状）
2 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込土の流れ込み）
3 黒褐色土（シルト質でしまりあり、柱痕）
4 黒褐色土（粘性は高いがしまりない、柱痕）
5 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込上）

P3
1 黒灰色土（粘性が高くしまりあり、地山粒を多く含む、柱痕）
2 灰褐色土（砂質で高くしまりあり、裏込土の流れ込みか、柱痕）
3 黒褐色土（粘性が高くしまりあり、柱痕）
4 黒灰色土（砂質でしまりあり、裏込土の流れ込み）
5 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込上）
6 黄灰色土（5層と同質、裏込上）

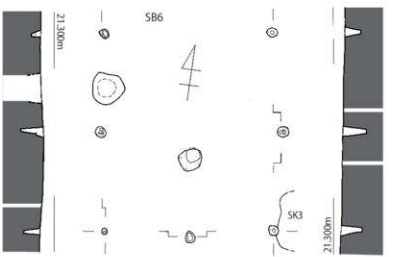
P4
1 灰褐色土（礫や砂質でよくしまる、地山粒を少量含む、裏込土の流れ込み、柱痕）
2 黒灰色土（シルト質でよくしまる、柱痕）
3 黄灰色土（3層に近い、よくしまる、裏込上）
4 暗黒褐色土（やや粘性が高くしまりあり、ブロック状に入る）
5 黒灰色土（シルト質でよくしまる、ブロック状に入る）
6 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込上）
7 黒灰色土（6層より粘性が高い、裏込上）

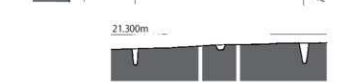
P5
1 黒灰色土（粘性が高くしまりあり、地山粒を少量含む、柱痕）
2 黒褐色土（粘性は高いが、しまりない、柱痕）
3 黒灰色土（1層に近い、裏込上）
4 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込上）
5 黄灰色土（4層と同質、裏込上）

P6
1 黒灰色土（シルト質でしまりあり、地山粒を少量含む、柱痕）
2 黄灰色土（1層に近く、より粘性が高い）
3 黒褐色土（粘質土層、しまりあり）
4 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込上）

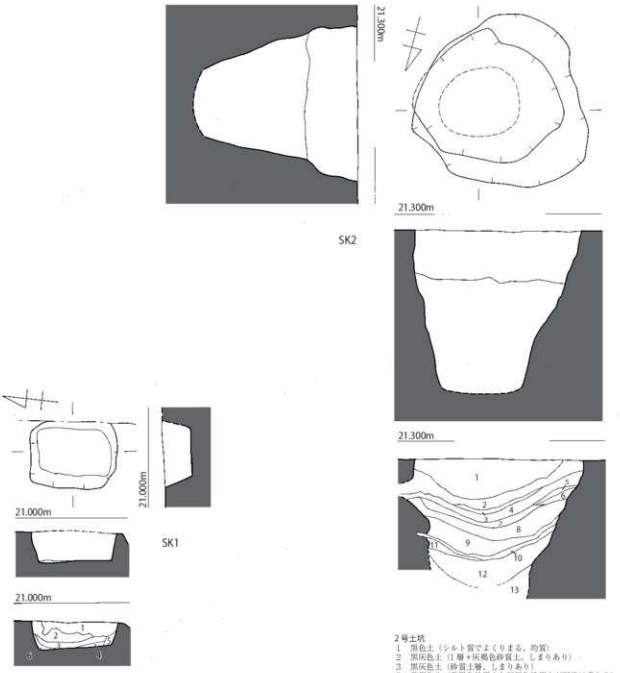
P7
1 黒灰色土（シルト質でしまりあり、均質、柱痕）
2 黒褐色土（粘性が高くしまりあり、柱痕）
3 黒褐色土（2層に近い中、より均質）
4 黄灰色土（砂質でしまりあり、裏込上）
5 黒灰色土（1層に近い、よくしまる）
6 黄灰色土（4層と同質、裏込上）

P8
1 黒灰色土（シルト質でしまりあり、柱痕）
2 黒灰色土（1層より粘性が高いが、しまりない、柱痕）
3 黒褐色土（シルト質でしまりあり）
4 黒褐色土（3層と同質）





第 11 図　5・6 号掘立柱建物実測図 (S=1/60)



1 号土坑
1　黒灰色土（シルト質でしまりあり。地山粒を多く含む）
2　黄灰色土（砂質でしまりあり。地山粒・地山ブロックを多く含む）
3　黄灰色土（2 層に近いが均質）
4　灰褐色土（砂質でしまりあり。地山ブロックを少量含む）
5　黒灰色土（シルト質でしまりあり。地山粒を多く含む）
6　灰褐色土（4 層に近い）

2 号土坑
1　黒色土（シルト質でよくりまる。均質）
2　黒灰色土（1 層＋灰褐色砂質土。しまりあり）
3　黒灰色土（砂質土層。しまりあり）
5　茶褐色土（茶褐色粘質土と灰褐色砂質土が層状に重なる）
5　黒褐色土（やや粘性が高くしまりあり）
6　茶褐色土（粘性が高い。ブロック状に入る）
7　黒褐色土（粘性が高いが。しまらない）
8　黄灰色土（黄褐色土と黒灰色土が互層状に堆積）
9　明黄褐色土（地山と同質。壁面の崩落層）
10　黒褐色土（粘性が高いが。しまらない）
11　明黄褐色土（9 層と同質）
12　黒褐色土＋茶褐色土（互層状に堆積）
13　明黄褐色土（9・11 層と同質）

0　2m

第 12 図　1・2 号土坑実測図 (S=1/40)

石製品（第 15 図）

第 15 図 1・2 は滑石製石鍋で、3 は石鍋片の再利用品である。1 は口径 25.8㎝を測る。外面には厚いススが付着している。3 は幅 9.9㎝を測り、2 ヶ所に穿孔が見られる。穿孔以外に二次加工はない。

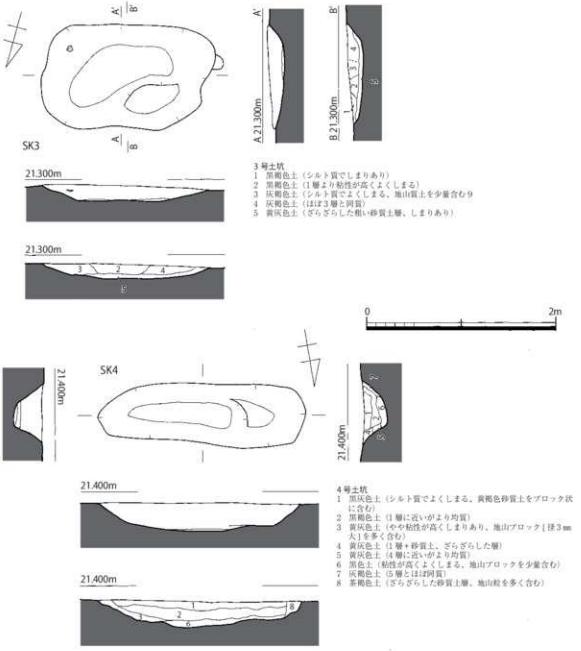
3 号土坑（第 13 図、図版 4）

B 区西部に位置し、6 号掘立柱建物に切られる。標高は 21.2 m を測る。遺構は楕円形状を呈し、上端で長さ 1.76 m、幅 1.09 m、床面で長さ 0.97 m、幅 0.53 m、深さ 16㎝を測る。埋土中から遺物が少量出土した。

出土遺物

土器（第 14 図）

第 14 図 13 は遺構図中に図示した土師質土器鉢の口縁部小片である。内外面ともにハケ目が残る。図示した遺物の他にも瓦質土器小片などが出土している。



第 13 図　3・4 号土坑実測図 (S=1/40)

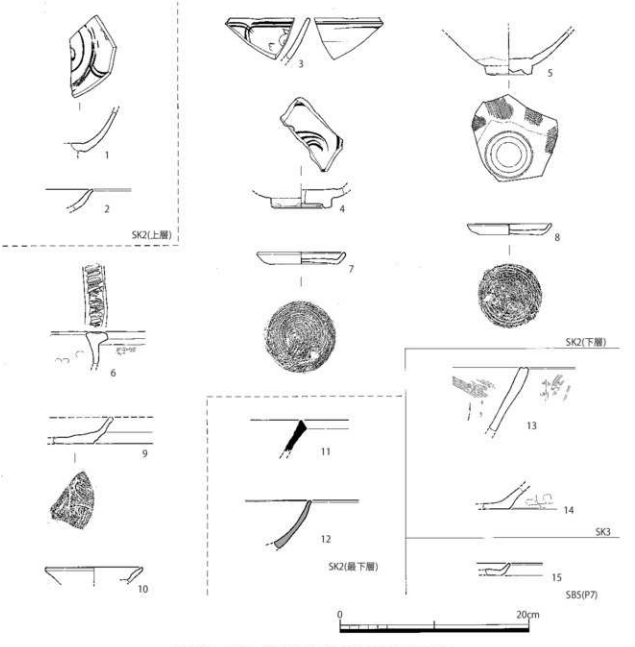
4号土坑（第13図、図版5）

B区南端部付近に位置し、標高は21.2 mを測る。当初は土壙墓と考えて調査を進めたが、明確な根拠は検出できなかった。遺構は隅丸長方形状を呈し、上端で長さ2.17 m、幅0.66 m、床面で長さ1.08 m、幅0.26 mを測る。壁面はなだらかに立ち上がり、深さは最大31㎝を測る。埋土のうち第8層は裏込め土の可能性が考えられるが、その他の箇所では確認できていない。

出土遺物

土器

土師器の小片が出土したが、詳細は不明である。



第14図　土坑・掘立柱建物出土遺物実測図 (S=1/4)

（3）溝状遺構

1号溝状遺構（第3・16図、図版6）

A区西部に位置する大型の溝状遺構で、南北ともに未調査範囲へと延びる。検出面の標高は20.8 mを測る。長軸をN -6°- Wにとり、掘立柱建物群と方位がほぼ揃う。最大幅は2.59 mを測り、深さは最大59㎝である。壁面は比較的なだらかに立ち上がる。埋土のうち下層は流水を伴わない緩み状の層で、上層は流水による自然堆積層と考えられる。つまり、この溝が機能していた段階では、空堀状の機能を持っていた可能性が指摘される。出土遺物は極少量で、図示したのは古墳時代後期の須恵器坏身片である。しかし、先述したように、最下層から滑石製石鍋片の出土があり、遺構の時期は中世と考えられる。

出土遺物

土器（第17図）

第17図1・2はいずれも須恵器坏身の小片である。

石製品

最下層から滑石製石鍋片が出土したが、図示していない。

4号溝状遺構（第3図、図版6）

B区南西端部付近に位置し、ほぼ東西方向に延びる。遺構の残存状況が悪く、本来はどの程度の規模だったか不明である。標高は21.1 mを測る。長軸をN -84°- Eにとり、5号掘立柱建物と関連することが想定される。規模は現状で長さ3.56 ＋ α m、最大幅36㎝を測り、深さは2㎝程度しか残っていない。

出土遺物

なし

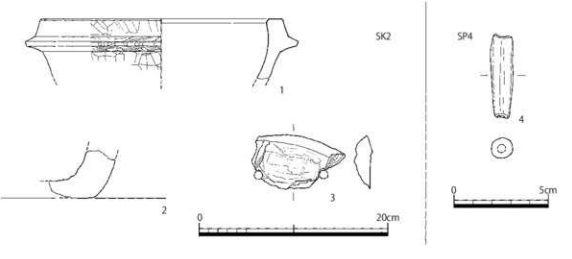
（4）ピット

今回の調査では約50基のピットを検出した。これらのうち、B区南東部の一群は、その配置から掘立柱建物の可能性も考えたが、ピットの数が揃わないことから今回はピットとして報告する。また、4号溝状遺構の南北に存在するピット群に関しても、周辺の遺構との有機的な関係も考えられるが、明瞭な答えは出ない。

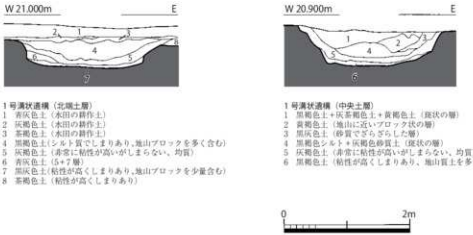
出土遺物

土製品（第15図）

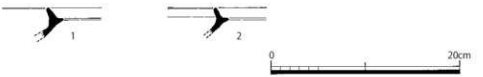
第15図4はP 4から出土した土錘である。長さは4.4㎝を測る。



第15図　中世遺構出土石製品及び土製品実測図（1～3はS=1/4、4はS=1/2）



第 16 図　1 号溝状遺構土層断面実測図 (S=1/60)



第 17 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 (S=1/4)

3．時期不明の遺構と遺物

（1）溝状遺構

2 号溝状遺構（第 3 図、図版 6）

A 区西端部付近に位置し、1 号溝状遺構に沿うように南北に直線的に延びる。標高は 20.8 m を測る。遺構の残存状況は悪く、南側は完全に削平されている。埋土は、黒灰色のシルト質土である。遺構の規模は、長さ 11.4 m以上、最大幅 0.59 m を測り、深さは最大 5㎝である。

出土遺物

なし

3 号溝状遺構（第 3 図、図版 6）

A 区東端部に位置する浅い窪み状の遺構で、標高は 20.8 m を測る。遺構の規模は、長さ 4.9 m以上で、幅は現状では把握できない。床面は階段状に下り、深さは最大 28㎝である。

出土土器

土師器の小片が出土したが、詳細は不明である。

5 号溝状遺構（第 3 図、図版 6）

A 区北西端部でわずかに確認した。標高は 20.8 m を測る。遺構の規模は、長さ 1.1 m以上、最大幅 34㎝を測り、深さは最大 14㎝である。

出土遺物

なし

第4章　まとめ

三沢宮ノ前遺跡３は、西側からＡ・Ｂ・Ｃの３区に分けて調査を実施した。このうちＣ区で確認できたのは、弥生時代中期初頭の土坑１基及び時期不明のピット数基のみである。本来はＣ区の北側に広がる水田部分にも同様の遺構が存在していたと考えられるが、削平が著しく調査では確認できなかった。ここでは比較的遺構がまとまって確認されたＡ・Ｂ区について、その内容を検討してみたい。

Ａ・Ｂ区では掘立柱建物６棟、土坑４基、溝状遺構５条を確認した。これらのうち遺物がまとまって出土したのは２号土坑（井戸状遺構）のみであり、各遺構の詳細な時期は不明である。ただし、特に掘立柱建物群と溝状遺構において方位が近似するものが多く、同時期性が指摘される。

６棟の掘立柱建物の規模や内容は以下の一覧表のとおりである。

表１　掘立柱建物計測表

番号	長軸方位	間数	規模（単位はm・㎡）					備考
			桁間	梁間	桁行	梁行	身舎面積	
1	N-84-E	2×1	1.86～2.14	－	4.01～4.02	2.98～3.06	12.13	側柱
2	N-84-E	3×2	1.74～1.92	1.85～1.94	5.41～5.54	3.79～3.80	20.78	側柱
3	－	2×－	2.02～2.14	－	4.16	－	－	
4	N-81-E	2×2	2.19～2.30	1.51～1.77	4.46～4.59	3.25～3.28	14.77	総柱、庇
5	N-84-E	3×1	1.42～1.61	－	4.50～4.61	2.57～2.80	12.23	
6	N-9-W	2×2	1.50～1.60	1.31～1.33	3.10～3.12	2.64～2.68	8.27	側柱

表のとおり長軸方位に２種類あり、また、３号建物には建て替えが見られることから、全てが同時期とは考えられない。ただし、各遺構の切り合いが非常に少ないことから、ここではこれらを一括して取り扱い、集落としての様相を明らかにしたい。

６棟の掘立柱建物の中で最大のものは２号建物である。身舎面積は20㎡を超え、構造的にも唯一の３×２間建物であることから、この集落の中心となる建物の一つと考えられる。４号建物は北側に庇を持ち、今回検出した中で唯一の総柱建物である。６棟の中で最も梁行／桁行の比率が高く、他の建物とやや離れた場所に位置することからも倉庫としての性格が想定される。６号建物は柱穴が極端に小さい。長軸方位も他の建物群とほぼ直交することから、簡易的施設としての可能性が指摘される。土坑のうち１号土坑は１・３号建物に隣接し、方位が近いことからも関連性が考えられる。２号土坑は井戸で、今回の調査で唯一まとまった中世の遺物が出土した。最下層付近では多くの滑石製石鍋片とともに、完形の土師器皿２点を検出した。時期は13世紀前半頃と考えられる。１号溝状遺構は建物群の西側を南北に延び、集落範囲を区画するものと考えられる。出土遺物は極少量だが、最下層から出土した滑石製石鍋片の存在、そして走行方位から建物群との関係は明らかであろう。なお、４号溝状遺構はさらにその内部を区画する溝である。

最後に集落像であるが、当集落の特徴として大きく以下の２点を挙げることができる。

①規則正しく配置された掘立柱建物群と、それを外部と区画する大型の直線的な溝が存在する。

②出土遺物に滑石製石鍋片や青磁片が目立つ。

まず、①に関しては、市内でも大保横枕遺跡２などで同様の例が確認されており、小郡の中世集落の特徴を表すものと言える。②に関して近隣の同時期の遺跡を見ると、これらの貴重な遺物を持つ集落と持たない集落とがはっきり分かれており、当遺跡はその前者に当てはまる。谷を挟んだ１本西側の段丘上では、西島遺跡３や大保横枕遺跡２など豊富な遺物を持つ遺跡が存在するが、当段丘上では今回の調査が初見である。今後の小郡の中世集落の展開を考える上で、非常に重要な調査例となった。

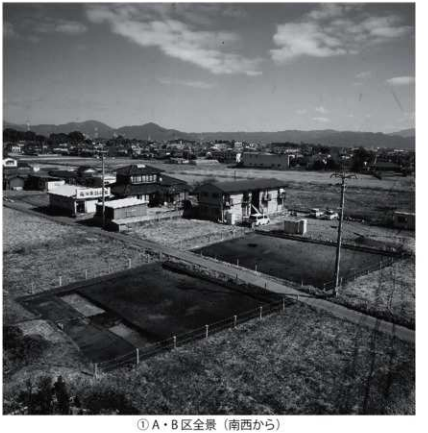
表 2　出土遺物観察表（土器・青磁など）

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考
5号土坑	第6図 1		弥・甕	残存高：4.5	外：にぶい黄橙色 内：橙色	微粒～4mmの砂粒を含む	良好	口：ヨコナデ 体・内外：ナデ、内指オサエ	上層出土
	2	7	弥・甕	口：(27.6) 残存高：15.5	にぶい黄橙色	微粒～4mmの砂粒を含む	良好	口・内外：ヨコナデ、一部指オサエ後ヨコナデ、上面ハケメ? 体・外：ハケメ 体・内：ナデ	
	3		弥・甕	口：(24.6) 残存高：11.8	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	1～5mmの砂粒を含む	良好	口：ヨコナデ、刻み目 体・外：ハケメ、指オサエ 体・内：ナデ、指オサエ	外面にスス付着
	4		弥・甕	残存高：19.2	にぶい黄橙色	1～4mmの砂粒を多く含む	良好	口：ヨコナデ 体・外：ハケメ 体・内：ナデ、指オサエ	外面に工具痕 沈線有り
	5	7	弥・壺	口：(14.4) 残存高：11.8 底：6.2 残存高：4.7	外：にぶい黄橙色～黒褐色 内：にぶい黄橙色	1～5mmの大小砂粒を多く含む	良好	口・内外：外ヨコナデ、内ミガキ 体・外：ミガキ、ヨコナデ 体・内：ミガキ、ナデ、指オサエ 底・外：ナデ 底・内：ナデ、指オサエ	内外面丹塗り後黒塗り
	6		弥・壺	つまみ径：4.7 残存高：4.0	黒褐色	微粒～2mm以下の砂粒を含む	良好	外：ミガキ 内：ナデ、指オサエ	内外面黒塗り
2号土坑	第14図 1	7	青・碗	残存高：4.0	釉：オリーブ灰色 胎土：灰白色	精緻	良好	施釉	上層出土
	2		土・皿	残存高：2.1	にぶい黄橙色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	ヨコナデ	上層出土
	3	7	青・碗	残存高：4.4	釉：灰オリーブ色 胎土：灰白色	精緻	良好	施釉	下層出土
	4	7	青・碗	高台径：(6.4) 残存高：2.1	釉：灰オリーブ色 胎土：灰白色～暗灰色	微砂粒をわずかに含む	良好	体・内外：施釉 底・外：無釉、ケズリ出し高台	下層出土
	5	7	青・碗	高台径：4.4 残存高：4.5	釉：灰白色 胎土：灰白色	微砂粒を多く含む、4mmの砂粒も含む	良好	体・内外：施釉 体・外：下位回転ヘラケズリ 底・外：無釉、ケズリ出し高台	下層出土
	6		土・鍋	残存高：3.4	外：にぶい褐色 内：にぶい黄橙色	1～4mmの砂粒を多く含む	良好	口：ヨコナデ、上面ナデ・刻み目 外：ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ 内：ヨコナデ、指オサエ	下層出土
	7	7	土・皿	口：9.4 高：1.2 底：7.7	にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	体・内～外：ヨコナデ 底・外：回転糸切り 底・内：ヨコナデ後ナデ	下層出土
	8	7	土・皿	口：8.9 高：1.2 底：6.9	外：橙色 内：にぶい橙色	微粒～2mmの砂粒を含む	良好	体・内～外：ヨコナデ 底・外：回転糸切り、板状圧痕 底・内：ヨコナデ後ナデ	下層出土
	9	7	土・皿	残存高：2.7	にぶい黄橙色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	体・内～外：ヨコナデ 底・外：回転糸切り、板状圧痕か? 底・内：ヨコナデ後ナデ	下層出土
	10		青・皿	口：(10.3) 残存高：1.6	釉：灰色 胎土：灰白色	精緻	良好	施釉	下層出土
	11	7	須質・鉢	残存高：3.4	外：灰白色～暗灰色 内：灰白色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	ヨコナデ	最下層出土 外面に黒斑
	12	7	瓦・埴	残存高：5.1	外：暗灰色～灰白色 内：暗灰色～淡黄橙色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	口・内外：ヨコナデ 他は磨滅のため調整不明	最下層出土
3号土坑	13		土・鉢	残存高：6.8	にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	口：ヨコナデ? 体・内外：一部ハケメ、内工具痕	
	14		土・鉢	残存高：2.3	にぶい橙色～にぶい赤褐色	微砂粒を含む	良好	外：工具ナデかナデ 底・外：ナデ?	二次焼成を受け赤変
5号建物	15		土・皿	残存高：1.3	にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	底・外：回転糸切り 底・内：ナデ 他はヨコナデ	P7出土
1号溝	第17図 1		須・杯身	残存高：3.1	灰色	主に2mm以下の砂粒を含み、3～4mmの砂粒も含む	良好	回転ナデ	中層出土
	2		須・杯身	残存高：2.8	灰色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	回転ナデ	下層出土

法量＝口：口径、高：器高、底：底径、径：直径
器種＝弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器、青：青磁、瓦：瓦質土器、須質：須恵質土器

表3　出土遺物観察表（石製品・土製品）

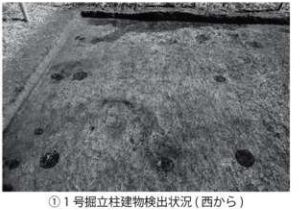
出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	石材	長さcm（残存値）	幅cm（残存値）	厚さcm（残存値）	重さg	備考
5号土坑	第7図1		台石	安山岩	11.4	(6.8)	4.7	468.0	上層出土
	2		石製投弾	安山岩	3.7	3.4	2.6	43.0	下層出土
	3		石製投弾	安山岩	4.6	3.2	1.8	32.2	下層出土
2号土坑	第15図1		滑石製石鍋	滑石	残存高6.3	口径(25.8)	—	—	最下層出土 外面に厚くススが付着 工具痕が明瞭に残る
	2		滑石製石鍋	滑石	残存高5.1	—	—	—	下層出土 外面にススが付着
	3		滑石製品	滑石	5.8	9.9	1.9	105.0	下層出土 穿孔2ヶ所（孔径0.45cm） 再加工品
P4	4		土錘	土製	4.4	1.2	—	4.8	色調：黒褐色 胎土：精緻 焼成：やや不良



① A・B 区全景（南西から）

② A・B 区全景（上空から）

図版 2

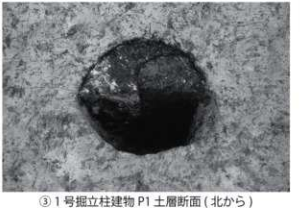


① 1 号掘立柱建物検出状況 (西から)

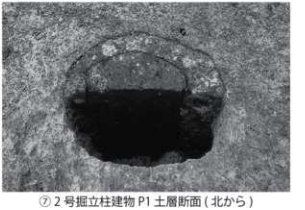
⑤ 2 号掘立柱建物検出状況 (西から)

② 1 号掘立柱建物完掘状況 (西から)

⑥ 2 号掘立柱建物完掘状況 (西から)

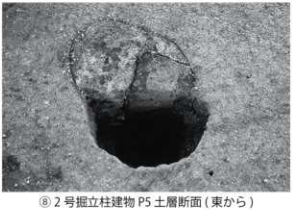


③ 1 号掘立柱建物 P1 土層断面 (北から)



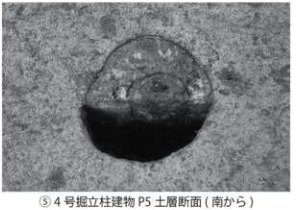
⑦ 2 号掘立柱建物 P1 土層断面 (北から)

④ 1 号掘立柱建物 P3 土層断面 (北から)



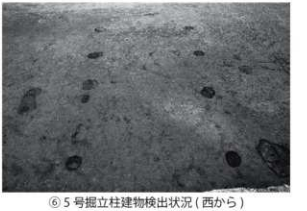
⑧ 2 号掘立柱建物 P5 土層断面 (東から)

① 3 号掘立柱建物完掘状況 (南から)

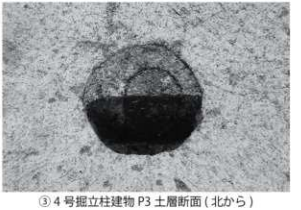


⑤ 4 号掘立柱建物 P5 土層断面 (南から)

② 4 号掘立柱建物完掘状況 (西から)

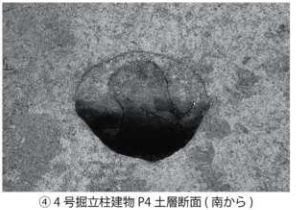


⑥ 5 号掘立柱建物検出状況 (西から)

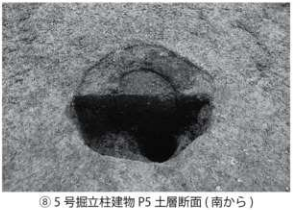


③ 4 号掘立柱建物 P3 土層断面 (北から)

⑦ 5 号掘立柱建物完掘状況 (西から)



④ 4 号掘立柱建物 P4 土層断面 (南から)



⑧ 5 号掘立柱建物 P5 土層断面 (南から)

図版 4

① 6 号掘立柱建物検出状況 (西から)

⑤ 2 号土坑土層断面 (北から)

② 6 号掘立柱建物完掘状況 (西から)

⑥ 2 号土坑完掘状況 (北から)

③ 1 号土坑土層断面 (西から)

⑦ 3 号土坑土層断面 (北から)

④ 1 号土坑完掘状況 (西から)

⑧ 3 号土坑土層断面 (西から)

① 3 号土坑完掘状況 (北から)

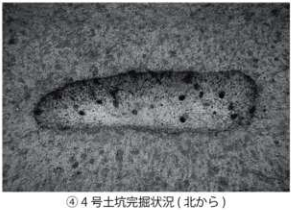
⑤ 5 号土坑土層断面 (北から)

② 4 号土坑土層断面 (北から)

⑥ 5 号土坑完掘状況 (北から)

③ 4 号土坑土層断面 (西から)

⑦ 5 号土坑土器出土状況 (南東から)



④ 4 号土坑完掘状況 (北から)

⑧ 1 号溝状遺構完掘状況 (南から)

図版 6

① 1 号溝状遺構土層断面 1(南から)

② 1 号溝状遺構土層断面 2(南から)

③ 2 号溝状遺構完掘状況 (南から)

④ 3 号溝状遺構完掘状況 (北西から)

⑤ 4 号溝状遺構検出状況 (西から)

⑥ 5 号溝状遺構完掘状況 (南西から)

⑦調査風景

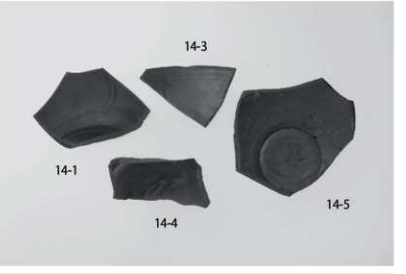
6-4

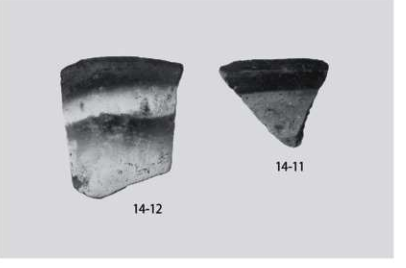
14-7

14-9

6-5

14-8





報 告 書 抄 録

ふりがな	みつさわみやのまえいせき3
書名	三沢宮ノ前遺跡3
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第271集
編著者名	杉本岳史
編集機関	小郡市教育委員会
所在位置	〒838-0198 福岡県小郡市小郡255-1 ☎0942-72-2111
発行年月日	2013年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三沢宮ノ前遺跡3（みつさわみやのまえ いせき）	福岡県（ふくおかけん） 小郡市（おごおりし） 三沢（みつさわ）	40216		33°24′56″	130°33′14″	2012.1.11～2012.3.16	1,064㎡	県道新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三沢宮ノ前遺跡3	集落	弥生時代 中世	土坑　1基 掘立柱建物 6棟 土坑　4基 溝状遺構　2条 ピット　など	弥生土器 土師器 青磁 瓦質土器 滑石製石鍋	

要約	三沢宮ノ前遺跡3は、小郡市北部の宝満川右岸に広がる三国丘陵から延びる段丘上に位置する。遺跡の中心は中世の集落で、規則正しく配置された掘立柱建物群や溝状遺構などが確認された。出土遺物は少量だが、井戸状遺構から多くの滑石製石鍋片や青磁碗片が出土している。遺跡の時期は13世紀前半頃と考えられる。隣接する段丘上でも過去の調査で中世の遺構が密集して確認されており、中世小郡の拠点である三沢から大保にかけての様相がまた一つ明らかになった。

三沢宮ノ前遺跡3

小郡市文化財調査報告書第271集

2013年3月31日

発行　小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡255-1

出版　片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園1丁目8-15